研究ノート

テッサロニキ出土のアテナ女神像の改作時期
ーローマ皇妃ユリア・ドムナ像の諸型式からの検証ー

松尾 登史子

Refashioning Dates on the Statue of Athena from Thessaloniki: Its Verification by Portrait Types of the Roman Empress Julia Domna

Toshiko MATSUO

テッサロニキのローマ期の「図書館」跡からアテナ・メディチ女神像のローマ期の複製品が出土した。G. デスピニスは、女神像の様相からローマ皇妃ユリア・ドムナの肖像に改作されたという説を提示し、更にその改作は3世紀初頭に行なわれたと推測している。本稿では、ユリアの肖像の型式分類から改作後のアテナ像の型式を特定し改作時期についての検証を行なった。その結果、テッサロニキのアテナ女神像はユリアのレプティス型肖像に改作されたと判断され、それが行なわれたのは同型式の開始年代203あるいは207年以降であったことが判明した。

キーワード：アテナ・メディチ（女神像）、ローマ期の複製品、ローマ皇妃ユリア・ドムナ、改作、レプティス型式

A roman copy of Athena Medici was unearthed from the architectual remains identified as a roman “library” in Thessaloniki. G. Despinis presented a view that the statue should be refashioned as a portrait of the Roman empress Julia Domna, estimating the date of refashioning at the beginning of 3rd century A.D. In this article Despinis’ dating is verified by specifying the type of refashioned statue from several types of portraits of Julia Domna. As a result, it can be concluded that the statue of the goddess was refashioned into a portrait of Julia in the Leptis type after A.D. 203 or 207 at which the type appeared.

Key-words: Athena Medici, Roman copy, the Roman empress Julia Domna, refashioning, the Leptis type

はじめに

首都アテネに次ぐギリシア第2の都市テッサロニキ（Thessaloniki）は、エーゲ海に面したギリシア北部の港湾都市である（図1）。このテッサロニキを中心とするマケドニア（Macedonia）地方ではかつて古代マケドニア王国が興隆し、南部ギリシアと異なったギリシア文化が花開いた。これが、アレクサンドロス大王（Alexandros Ⅲ: 在位紀元前336-323年）により東方へ伝えられたヘレニズム文化である。テッサロニキがカサンドロス王（Kassandros: 在位紀元前316-297年）により建てられたのはマケドニア王国の最盛期の頃紀元前316年（あるいは315年）であったが、以来2300年余りの歳月を都市としての機能を連綿として維持し現在に至る。

そのテッサロニキの市中心部において発掘されたローマ期の建物跡から超等身大[1]の女人立像が出土した。その形状から、古典期につくられたアテナ・メディチ（Athena Medici）といわれる女神彫像の、ローマ期、特にハドリアヌス帝（Publius Aelius Hadrianus: 在位紀元117-138年）末期からアントニヌス帝（Titus Aurelius Fulvus Boionius Arrius Antoninus: 在位紀元138-161年）初期の複製品であることが判明したが、更なる調査の結果、同像の後世における改作が確認されるに至った。G. デスピニス（Despinis）によれば、ローマ皇妃ユリア・ドムナ（Julia Domna: 紀元165-217年）の像への改作が行なわれたという（Despinis 1977）。

本稿では、現在においてほぼ受容されているデスピニスの改作説に関して、この女神像の改作が行なわれた時期を考古学的に特定し、デスピニスによる改作時期推定を検証することを目的とする。この作業によって、ローマ期のテッサロニキにおいて古典期の女神像複製品がなぜローマ皇妃像に改作されたのかという問いを通じて、ローマ期テッサロニキとローマ帝国特にローマ皇帝一族との関わりが示

西アジア考古学　第8号　2007年　143-154頁
© 日本西アジア考古学会

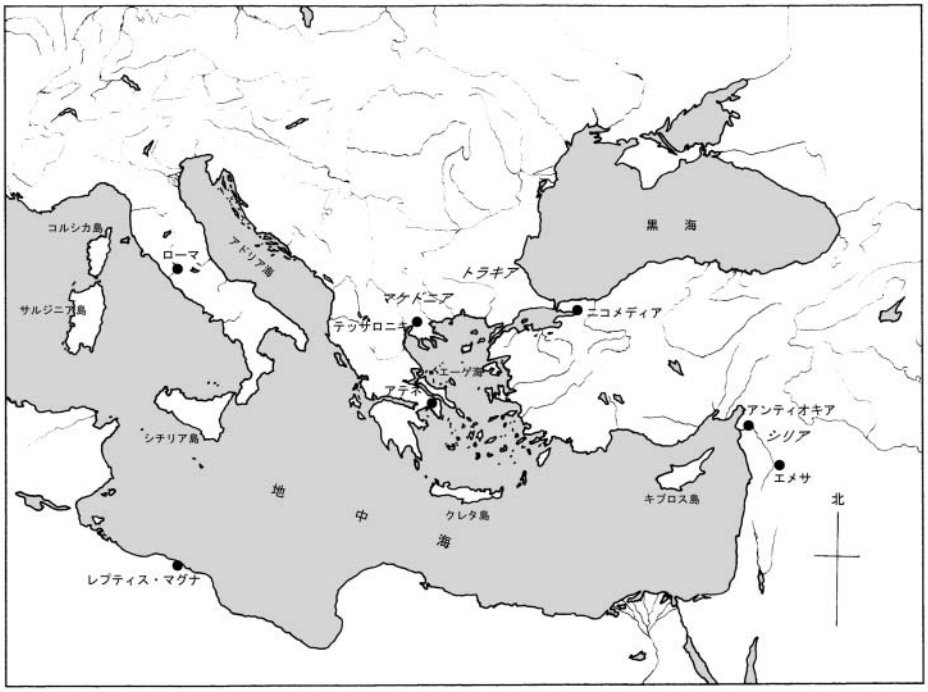


図１　東地中海周辺地図

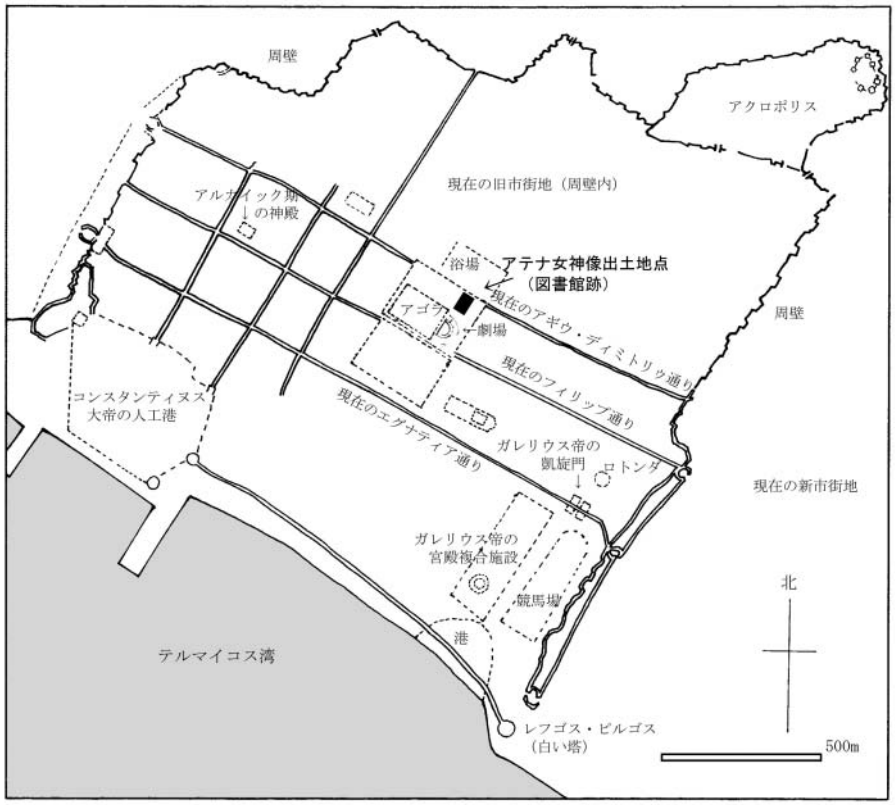


図２　現在のテッサロニキ旧市街とローマ期の建築遺構位置図
（Touratsoglou 1997: fig. 75 より一部改変して筆者作成）

唆され、ローマ帝国内のテッサロニキの政治的位置づけ解明への手掛かりになることが将来的に期待される。

改作時期推定の検証手段としては、ローマ帝国の慣習に倣いその生涯に渡ってつくられ続けた皇妃ユリア・ドムナの肖像の分類からテッサロニキのアテナ女神像の改作後の型式を割り出し、その改作時期を特定する方法を採る。

主題の背景：アテナ女神像の出土状況と遺物の様相、及びデスピニスの説

現在のテッサロニキにおいて、都市建設当時のヘレニズム期及びローマ期の遺跡は現在の市街地下に埋もれており、その全貌を明らかにすることには大いに困難が伴う。しかしながら、20 世紀の初頭以来、徐々ではあるが旧市街地の発掘調査が進み、現在ではローマ期の凱旋門や宮殿複合施設、アゴラ（agora）[2]、周壁などの建築遺構が発掘され、修復、保存されるに至り、現在の都市の一部として街並みに溶け込んでいる（図 2）。ただ、ローマ期に比して、それに先立つヘレニズム期の建築遺構の出土数は遥かに少ないといえる。

1924 年、Str. ペレキディス（Pelekidis）は、テッサロニキにおけるローマ期のアゴラ建築遺構の北東角、現在のオリンプ通り（odos Olympou）とアグノストゥ・ストラティオトゥ通り（odos Agnostou Stratiotou）が交差する地点に出土した「図書館」と解釈される建築物（紀元 4 世紀末あるいは 5 世紀初頭）から、超等身大の女人立像を発見したと発表した（Pelekidis 1925）。

女人像は、ローマ皇帝セプティミウス・セウェルス（Lucius Septimius Severus: 在位紀元 193-211 年）の胸像を含む数点の像と共に、壁にはめ込まれた状態で出土した[3]。女人立像を構成する残存部分は、1）頭部（写真 1-a, b, c）、及び、2）右腕部（残存長 40cm）、3）右下半身部（残存長 176cm）、の 3 点で、いずれも粗肌の白大理石製である。現在は、テッサロニキ考古学博物館に所蔵されている[4]。以下に、問題となる頭部を簡単に描写する（Despinis et al. 1977: 97-99 より）。

頭部は、首及び、胸部の上の部分までが付いた状態で出土した。兜を冠った長髪の人物の像である。首と胸上部を含めた高さは 69.5cm、兜を含めた頭頂部から顎までの高さは 39.3 cm である。鼻の先端及び左耳たぶ、兜の装飾の大部分が欠け、更に、唇の左上部分や髪の毛と兜の左側の部分が各々わずかに欠けている。兜の表面に装飾部分を支えたと見られる多数の穴が穿たれている。兜の頭頂部を前後に走る尾根部分の左右に 2 つの方形の穴（左穴は 2.3 × 2.7cm 深さ 3.8cm、右穴は 2.5 × 2.5cm 深さ 3.7cm）があり、その前方の 2 つの浅い窪みと共に、兜の上面の装飾部分を支えたものと見られる。兜の縁の前面部分に並んだ 11 の小穴（直径 0.6cm 深さ 2.4cm）、及び、こめかみ上部の 2 つの方形の穴（左穴は 2.5 × 1.5cm 深さ 3.7cm、右穴 2 × 1.5cm 深さ 3.5cm）も、同様の役割のものと見られる。また、額から始まって頬と耳の間までの部分に 0.5cm 程の低い段が設けられていて、その表面は、鑿のような道具を使用したと考えられる粗目の傷跡とその上に穿たれた無数の小穴（直径 0.4cm 深さ 1cm）で埋められていた。これらの粗傷と小穴は、段の表面だけではなく、後ろ顎や首筋、うなじにかけても広がっている。

ペレキディスは、この像が、やや右方向を向き、アッティカ風の兜を冠り、後ろ髪がうなじから下方向にまとめられて垂れている様相を持つことから、古典期の彫刻家フェイディアス（Pheidias）一派の作といわれるアテナ・メディチ女神像[5]のローマ期（特に紀元 2 世紀第 2 四半期頃）の複製像である、との結論を出した（Pelekidis 1925: 141）。更に、この頭部に加え、右腕部と右下半身部の詳細を観察した結果、アクロリトス（Akrolithos）方式[6]により製作されていたことも明らかになった。

一方、デスピニスは、上に示した女人像の頭部の頬やうなじに広がる粗傷と小穴に着眼し、更に面貌の特徴を検討し、このアテナ女神像が後世に別の人間の像に改作されたのではないかと推定した[7]（Despinis 1977: 98）。そして、その改作後の模された人物はローマ皇妃ユリア・ドムナであったいう説を提示した（前掲書: 98-99）。デスピニスの説の根拠は、以下の 2 点である。つまり、1）女人像の頬やうなじ上の粗傷と小穴が広がる範囲は、上から別の髪型を被せる際の接着部分であったことを示す。その部分の描く輪郭は、本来作り付けてあるアテナ女神の髪型と統一性がなく、後で作り付けられた可能性がある。2）女人像の面貌のみが、古典期のフェイディアス一派の作品から懸け離れ、現実に存在した人間を描写したかのようである。そして、その面貌からローマ皇妃ユリア・ドムナと特定出来るとした。

1）については、別の髪型を構成する鬘部分の接着を容易にする為に故意にその部分に凹凸の傷をつけていたと見られる。これは、アントニヌス朝後期からセウェルス朝期の像に看取される現象である。

2）については、既に E. ラングロッツ（Langlotz）がこのテッサロニキ出土の女人像がローマ皇妃ユリア・ドムナに似ていることを述べてはいるが、後世の改作の示唆まで踏み込んではいない（Despinis 1971: 218）。デスピニスは女人像の顔の状態について以下のように描写している。「額は解剖学的ともいえる現実描写的な造型をしており、角張った輪郭を持つ強調的な眉毛のつくりは、古典期の像に見られる薄らとした優美な曲線を描く眉毛のそれには程遠い。やや鷲型の鼻、動き出すかと思われるようなリアル

a　正面

b　右側面

c　左側面

写真１　アテナ・メディチ女神像、テッサロニキ出土、テッサロニキ考古学博物館所蔵（n.877）
（写真提供：テッサロニキ・アリストテレス大学）

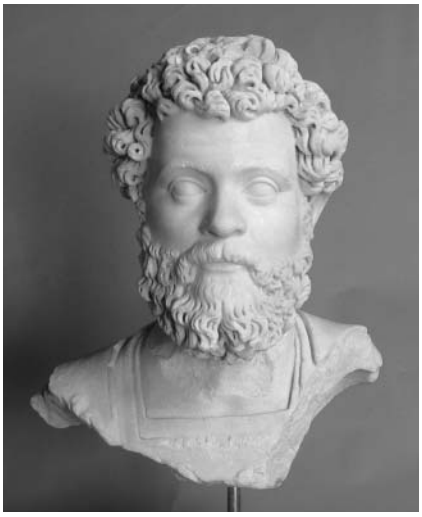


写真２　セプティミウス・セウェルス胸像、テッサロニキ出土、テッサロニキ考古学博物館所蔵（n.898）
（写真提供：テッサロニキ考古学博物館）

な上唇を持つ小さな口、口周辺のたるんだ皮膚、内側へ引っ張られたかのような小さな下顎…（中略）…顎のたるみと首の皺…」さらに、「元の女神の顔面を 5mm ほど削った跡があり、新たな顔の特徴をつくる為に削りとったものと見られる。元の女神の肌は額と頬の一部のみに残る。」と記している（Despinis 1977: 98-99）。そして、改作の際に「髪型をつくるに足る大理石がなかった為」既に 1）で述べた方法で、「髪型を上から被せた」と結論している（前掲書）。改作後の面貌がユリア・ドムナであるという解釈は、共伴の男性胸像（写真 2）がユリアの配偶者であったセプティミウス・セウェルス帝と解釈されたことからもその確かさが裏付けられるといえる。

デスピニスは、上の改作が、ユリア・ドムナの息子であるカラカラ帝（Caracalla: 在位紀元 211-218 年）の東方遠征の際、つまり紀元 214-217 年の間に行なわれたと推測している（前掲書）。母后ユリアを伴ったこの遠征に関しては、トラキア（Thrake）からニコメディア（Nikomedeia）を通過してアンティオキア（Antiocheia）に至ったことが判明している。ただし、マケドニアを通過したという物証は現在のところ発見されていない。

主題：皇妃ユリア・ドムナの生涯と肖像の諸型式

テッサロニキのアテナ女神像の改作年代が紀元 214-217 年の間であったというデスピニスの推測を考古学的に検証する為に、以下にユリア・ドムナの生涯と特徴的な髪型を被った肖像の分類と各々の編年を示す。

１．ユリア・ドムナ（紀元 165-217 年）の生涯[8]

ユリア・ドムナはローマ皇帝セプティミウス・セウェルスの配偶者であり、カラカラ帝とゲタ帝（Publius Septimius Geta: 在位紀元 211-211/212 年）の母であった。シリア、エメサ（Emesa）の大司祭バシアノス（Julius Bassianus）の娘として紀元 165 年に生まれた。紀元 185 年頃、のちにローマ皇帝となるセプティミウス・セウェルスに嫁す。

北アフリカのレプティス・マグナ（Leptis Magna）出身のセプティミウス・セウェルスは、コンモドゥス帝（Commodus: 在位紀元 180-192 年）亡き後の混乱期に頭角を現わして権力を掌握し、193 年、帝位に就いた。地方出身の武力に長けたこの新皇帝に欠けていたものは権威であり、新たな王朝樹立を確実にする為にも、あらゆる手段を講じて帝室の権威づけを行なった。したがって、皇妃ユリア・ドムナと二人の息子カラカラ及びゲタに早くから多くの称号を与えた。このような環境の下、ユリアは、ローマ皇妃としてリウィア[9]（Livia: 紀元前 58-後 29 年）に次いで絶大な権力を振るったとされ、その生涯において多くの称号を獲得した（Kleiner 1992: 325-326）。まずセウェルス帝の数々の遠征に従軍したことから得た「駐屯地の母（Mater Castrorum）」の称号、紀元 198 年に長男のカラカラが「アウグストゥス（Augustus: 尊厳なる人。皇帝の尊称）」、次男のゲタが「カエサル（Caesar: 副帝）」の称号を各々獲得した際には、「アウグストゥスとカエサルの母（Mater Augusti et Caesaris）」の称号、紀元 211 年にセウェルス帝の死に際しては、「敬虔で幸せな人（Pia Felix）」の称号を得た（Mattingly 1990: 187）。文化に対する関心も高く、宮廷の身辺に常に名高い哲学者や芸術家を集める一方、故郷のシリアからの生活文化を積極的に王宮生活に取り入れた。後述する特徴的髪型はシリアからの風習を取り入れた結果であった（Hinks 1976: 85）。

また、セプティミウス・セウェルス帝は自らの権威を高めるために過去の皇帝らの栄光を利用し、特にマルクス・アウレリウス帝（Marcus Aurelius: 在位紀元 161-180）やコンモドゥス帝と自身の関連を強調した。更にマルクス・アウレリウス帝に似せた自身の像の風貌は故郷のセラピス神との関連をも示唆した（Kleiner 1992: 351）。このような神格化は帝室一家に及び、神の一家としてセウェルス帝とユリア、カラカラ及びゲタが共に納まった肖像が多くある[10]。ユリア・ドムナ自身も権威増強と自己顕示の為に自らをヘラやデメテル、ヘスティア、テュケなどの女神などに似せた姿で表現させた個々の彫像を多く残した（Despinis 1977: 101; Ghedini 1984: 132）。カラカラ・マスター（The Caracalla Master）と呼ばれた彫刻家はセウェルス帝一家の多くの肖像を手掛けたが、ユリアの後ろ楯により活躍が可能であったと言われている（Kleiner 1992: 328, 353）。

T. ミコッキ（Mikocki）によれば、ユリア・ドムナのア

テナ女神への関連づけは頻繁に強調されたものであった（Mikocki 1995: 75）。既述のように、哲学者などの文化人を宮廷に集めたことから「哲学皇后」の異名を取り、また「駐屯地の母」の称号を得たことなどは、女神アテナの「知」や「武」の神性と重ねられ、皇妃の威徳の宣伝に利用されたと考えられる（Despinis 1977: 101）。

北アフリカのレプティス・マグナの凱旋門の壁面の浮き彫りには、皇帝一家のなかに納まるユリア・ドムナの後ろに女神アテナの姿が描かれている（Mikocki 1995: 75）。ユリアが女神アテナに縁が深い女神テュケとして描かれている硬貨も見られる。また女神アテナの名を冠した都市アテネとの関係は、アテネのアゴラから出土したユリアの小像の頭部や、アテネ出土の碑文により示唆される（Thompson 1958: 155）。後者の碑文には、ユリアが度々女神アテナ・ポリアス（Athena Polias: 都市守護女神アテナ）[11] と同一視されたことやパルテノン神殿にこの皇妃の黄金の立像が安置されたことが記されていた。また、R. シュルター（Schlüter）によれば、アテネのアクロポリス博物館所蔵の浮き彫りに描かれているユリアの姿もまたアテナ・メディチ女神像のものであるという（Schlüter 1977: 127）。デスピニス は、テッサロニキ出土のアテナ女神像の改作が、単なる肖像製作の為だけではなくローマ皇妃ユリア・ドムナに対する信仰を意図したものであるとの見解を述べている（Despinis 1977: 101）。

２．ユリア・ドムナの肖像の分類

ユリア・ドムナが生涯に渡って製作させた自らの肖像は、彫像をはじめ、浮き彫りや硬貨、板絵など様々な媒体に残るが[12]、J. マイシュナー（Meischner）によれば、主に髪型の特徴から以下の６型式に分類され得る（Meischner 1964: 30-68）。

1）ガビイ（Gabii）型
2）ウィーン（Vienna）型
3）レプティス（Leptis）型
4）ベルリン（Berlin）型
5）ミュンヘン（Munich）型
6）バチカン（Vatican）型

各型式の名称は代表的な肖像が現在所蔵されている場所から採られ、また、各型式の年代は、発行されたユリア・ドムナの硬貨による編年を基本に皇妃の生涯における出来事とを照らし合わせて決定された。研究者によっては、上述の６型式の中でガビイ型とレプティス型の２つのみが主な型式で、残りの型式はそれらから派生した亜型式、つまりガビイ型からはウィーン型とミュンヘン型、バチカン型が、レプティス型からはベルリン型が派生した、との見解を持つ（Kleiner 1992: 326）。実際、これら亜型式とされる型式には少数の例しか確認されていず、また各々の細かな編年が不可能であるので、本稿の目的から判断して、これら亜型式は主型式であるガビイ型あるいはレプティス型に組み込んで差し支えないと考えられる。従って、筆者はマイシュナーの上述の６型式をガビイ型系としてのガビイ群とレプティス型系としてのレプティス群の２群に分けて下に示す。

（１）ガビイ群（写真 3, 5-a, b, c）

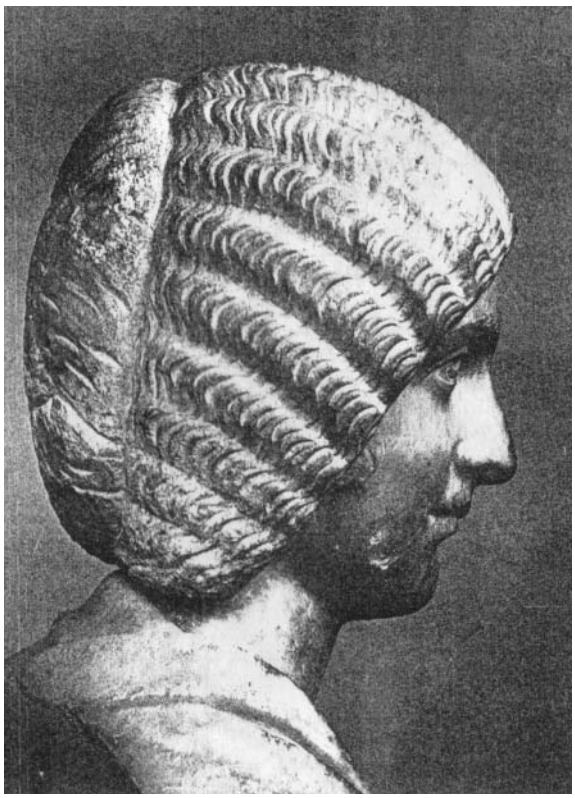
存続年代は紀元 193-204 年と比定される。硬貨の他に像 32 体と浮き彫り２例が残る（Fittschen 1978: 37）。原型は、セプティミウス・セウェルス帝の在位時頃のもので、ガビイ型の存続期間は夫帝の肖像の第１型のそれとほぼ一致する[13]。

編年の元となった硬貨には「アウグスタ（AUGUSTA: 皇妃の尊称）」の称号が見え（写真 3）、ユリア・ドムナがこれを獲得したのが紀元 193 年であった。この称号は、セ

写真３　ガビイ型ユリア・ドムナ肖像が彫られたアウレウス（Aureus）金貨（紀元 193-196 年発行）、製作地ローマ、大英博物館所蔵（写真提供：ロンドン、大英博物館。縮尺２倍）

写真４　レプティス型ユリア・ドムナ肖像が彫られたセステルティウス（Sestertius）真鍮貨（紀元 196-211 年発行）、製作地ローマ、英国個人所蔵（Kent, Overbeck und Stylow 1973: Taf.95 n.403）

a　正面



b　右側面

c　左側面

写真 5　ガビイ型ユリア・ドムナ像、シュトゥッツガルド・ヴュルテンベルク州立博物館所蔵
（Goette 1986: Taf. 98-1, 99-1, 100-1）

プティミウス・セウェルス帝が滅し、ユリアが「敬虔で幸せな人」の称号を得る 211 年迄のあいだ、硬貨の面を飾った。

さて、ここにおいてユリア・ドムナの面貌は、面長の顔に張りのある頬、大きな目、高い鼻、突き出した顎を持ち、その顔の周囲にはガビイ型の特徴といえる独自の髪型が張巡らされている。髪は額の中心で分けられて、波打ちながら左右に流れて、耳を隠し、毛先は残りの後ろ髪と共に後頭部で大きな髷を形づくる。この髷は、ガビイ型の後期になると編み髷となる。髪型は鬘と見られ、頬の辺りに自毛と見られる髪の房が覗く。

ガビイ型に属する肖像の面貌は個体により多少異なる。上述の称号の施された硬貨における肖像は比較的理想化された様相で、年齢的に若いものと考えられている[14]。ガビイ型の名称の元となった、ガビイから発見され現在ルーブル博物館に所蔵されている肖像は、上記の硬貨の肖像よりも年を取った面貌を持つ。K. フィッチェン（Fittschen）によれば、ローマ期当時の肖像は理想化されたものから現物描写的なものへの移行という全体的な風潮が見られ、ユリアの肖像もその例外ではなく、面貌からの年齢及び年代判定は無意味であるという（Fittschen 1978: 37）。

このガビイ型には上記以外に、シュトゥッツガルド（Stuttgart）のヴュルテンベルク（Württemberg）州立博物館所蔵の胸像（写真 5-a, b, c）やエジプトから発見された板絵などがあるが（Goette 1986: 245-248; Kleiner 1992: 321）、同型の最後の年代を示すものは紀元 204 年の建造と比定されるローマのアルゲンタリイ（Argentarii: 両替商寄進の）凱旋門における浮き彫りである（Kleiner 1992: 326）。

（2）レプティス群（写真 4, 6-a, b, 7-a, b, c）

存続年代は紀元 203（あるいは 207）-217 年と比定される[15]。硬貨の他に少なくとも像 17 体が残るとされる。原型の存続年代は、セプティミウス・セウェルス帝の肖像の第 4 型（註 13 参照）のそれとほぼ一致する。

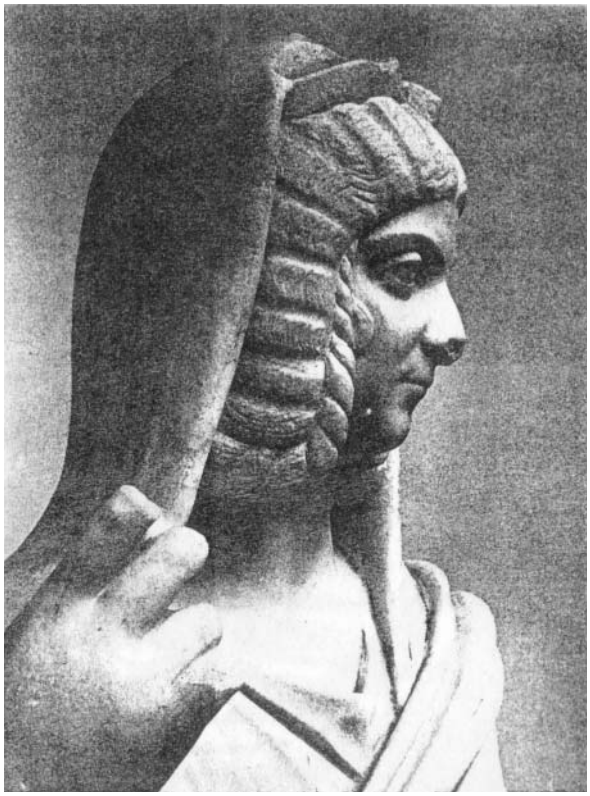
レプティス型のユリア・ドムナの様相については、ローマで製作され現在英国の個人により所蔵されているセステルティウス真鍮貨（紀元 196-211 年発行）における肖像にその典型が見られる（写真 4）。その特徴は、ガビイ型と比べ、髪型（鬘）自体が大きくなり、両側面に各々 10 段の巻き編み房が垂れ、後頭部の髷も編んだものに代わってその位置はうなじ近くまで下がる。鬘は、ガビ型と同様、ヘルメットのように耳や後ろ頬を覆う。

レプティス型の名と年代を決定した肖像は、北アフリカのレプティス・マグナのセプティミウス・セウェルスの凱旋門の浮き彫り由来である（Kleiner 1992: 326）。凱旋門の 4 面にセウェルス帝一家が描かれ、その中の 2 面上に登場するユリア・ドムナの肖像は比較的残りが良い（写真 6-

a　　b

写真 6　レプティス型ユリア・ドムナ肖像、レプティス・マグナ、セプティミウス・セウェルス凱旋門浮き彫り
（Ghedini 1984: Fig. 6, 7）

a　正面



b　右側面

c　左側面

写真 7　レプティス型ユリア・ドムナ像、オスティア博物館所蔵
（Goette 1986: Taf. 103, 104）

a, b)。この凱旋門の年代の比定は確定しておらず、研究者のあいだで紀元203年あるいは207年という2説に割れている[16]。従ってレプティス型式の出現年代もいまだ定まっていない。

レプティス型には、イタリアのオスティア（Ostia）博物館所蔵の女神ケレス（Ceres）扮装の立像（紀元203年。写真7やワルシャワの浮き彫り[17]などがある。

結論：アテナ女神像の改作年代

1．アテナ女神像の改作後の型式

上述の分類結果から以下の理由に依り[18]、テッサロニキ出土のアテナ女神像の改作後のユリア・ドムナ肖像はレプティス群レプティス型と判断できる：テッサロニキ出土の女神像の改作の為に加えられた部分鬘、つまり、頬やうなじに広がる粗傷と小穴の範囲の輪郭線は、ユリア肖像のレプティス型の髪型（鬘）の側面輪郭線と類似したかたちを描いていると考えられる。つまり、こめかみ部分から開始され後ろに大きく彎曲する曲線は、特に女神像の左側面において顕著に看取されるが、レプティス型の巻き編み房の開始点に一致し、更に、その箇所から下へ続く後ろ頬上の髪型輪郭線の緩やかな波形ラインは、特に女神像の右側面において顕著に現われているが、レプティス型の巻き編み房の段からつくられたものと解釈できる。

この髪型の側面輪郭線のガビイ型とレプティス型の相違は、各々シュトゥッツガルドの像（写真5-b, c）とオスティアの像（写真7-b, c）の側面を観察すれば明らかであるといえよう[19]。

2．アテナ女神像の改作年代の比定

したがって、アテナ女神像の改作年代はレプティス型式の製作開始年代の紀元203年あるいは207年以降であると解釈される。

おわりに

上述の結果より、テッサロニキのアテナ女神像の改作時期をカラカラ帝の東征が行なわれた頃（紀元214-217年）とするデスピニスの推測に十分な可能性があることが明らかになった。

ただし、更に、デスピニスによる「ユリア・ドムナがカラカラ帝の東征に随行した際テッサロニキを訪問し、アテナ女神像を改作した」という推定の検証に踏み込む為には、テッサロニキのアテナ女神像と共伴のセプティミウス・セウェルス像の出土状況と遺構との関連についての再調査は当然のことながら、カラカラ帝の東征についての他のあらゆる可能性を模索しつつ、ローマからトラキアを経由してアンティオキアへ至ったという道筋を正確に洗い出し、肖像などの考古学的遺物の存在を検証する必要がある。肖像の媒体上で頻繁に共伴するカラカラ帝の肖像の型式への注目も有効であろう。また一方で、ローマ期における「改作現象」の一般的特徴と分布を見極め、特にテッサロニキ出土で同じような「改作現象」が見られるもう一例の肖像（註7参照）を参考にするという方向や、ユリア・ドムナとアテナ女神との関連を整理するという方向から、テッサロニキのアテナ女神像の改作時期ひいてはその経緯を明らかにすることも必要であろう。

いずれにせよ、上述のカラカラ東征との関わりの如何を問わず、本稿で特定したテッサロニキの女神像改作時期はローマ期のテッサロニキとローマ帝室との関連、同都市におけるローマ帝国支配の有り様を理解する一つの鍵となろう。

謝辞

本論に関してご指導下さり、又、アテナ女神像の写真をご提供くださった、ギリシア国立テッサロニキ・アリストテレス大学大学院哲学研究科のTh. ステファニドゥ・ティベリウ（Stephanidou-Tiveriou: Θ. Στεφανίδου–Τιβερίου）先生に心より感謝申し上げたい。また、アテナ女神像共伴の男性胸像の画像については、テッサロニキ考古学博物館より館長のP. アダム＝ヴェレニ（Adam-Veleni: Π. Αδάμ–Βελένη）氏のご理解の下ご提供頂き、更に、ユリア・ドムナのガビイ型硬貨の写真については、大英博物館に提供を仰ぎJ. ラーキン（Larkin）氏にご協力頂いた。この場を借りてお礼を申し上げる。

凡例

1）転写と語句：名詞に関して以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては研究者名及び地名テッサロニキのみを現代語読み、それ以外は古典語読みとした。

【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、地名についてはカタカナに転記しその後の（　）内に原語を記し、人名については、神名および歴史上の人名はカタカナに転記して（　）内に原語、更に必要に応じて存命あるいは在位期間を記した。研究者などの人名はカタカナに転記し（　）内に原語を記したがその際ギリシア語名はラテンアルファベットに転記した。

【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し（　）内あるいは注釈に原語と若干の説明を加えた。

2）文献：ギリシア語文献についてはラテンアルファベットによる略語を付した。

3）図版：参照図版に関しては本文中の（　）に通し番号を挿入し、出典に関しては各図版下の（　）に記した。

註

1）του υπερφυσικού μεγέθους（Despinis 1975: 11）

2）テッサロニキのローマ期アゴラ（Roman Forum）については Bakirtzis 1977 参照。

3）「図書館」遺構におけるこれらの彫像の出土状態に関する詳細情報は平面図等を含めて入手できなかった。図及び写真は公開されなかった可能性もある。

4）テッサロニキ考古学博物館整理番号877。セプティミウス・セウ

ェルス胸像も同博物館所蔵であり番号 898。

5）アテナ・メディチの原作女神像に関しては諸説があり見解が一致していないが、有力な説によれば、アテネのアクロポリスにおけるエレクティオン（Erechtheion）とプロピュレイア（Propylaia）の間に安置されていたというアテナ・プロマコス（Athena Promachos：臨戦のアテナ）のブロンズ製立像を紀元前 5 世紀第 3 四半期（紀元前 445 年頃か?）に再製作したものがその原形となったという。A. リンフェルト（Linfert）らによるこの説に関しては、Brouskari 1997: 242、また Despinis 1975: 25 註 62 を参照。

6）像の製作方法の一種。露出部分を大理石あるいは象牙製で、布などで覆われた部分は木製で、各々作り分けて、組み立てる方法。アクロリトス式製作法によるアテナ・メディチ女神像の彫像リストに関しては Despinis 1975 を参照。

7）これは改作現象（the Metarrythmisis（Μεταρρύθμισις）phenomenon）と呼ばれ、ヘレニズム後期及びローマ期に見られる。Despinis 1977: 98、特に註 10 を参照。また、テッサロニキ考古学博物館所蔵の彫像の中にはこのアテナ女神像以外に更に一例あり、これについては、Pantermaris 1972 を参照。

8）ユリア・ドムナの生涯については、Williams 1902; Bernoulli 1969; Buchholz 1963; Kleiner 1992 において詳しい。

9）アウグストゥス帝（Augustus：在位紀元前 27-後 14 年）の妃。

10）後述のローマのアルゲンタリイ凱旋門やレプティス・マグナの凱旋門の浮き彫り、エジプトから発見された板絵等に見られる。

11）アテネのアクロポリスにおけるエレクティオン内に祀られていたとされる。

12）ユリア・ドムナの銘字付き公式肖像についての分布・編年に関しては Fejfer 1984 参照。

13）セプティミウス・セウェルス帝の肖像は 4 ～ 10 型に分類されるが、4 型分類説を支持する研究者が多い。これに依れば、1）即位型（the Accession type）、2）遡及養子型（the Adoption type）、3）セラピス型（the Serapis type）、4）10 年型（the Decennial type）の 4 型に分類される（Kleiner 1992）。

14）他にコペンハーゲンから発見された肖像がこれに近い。

15）上限の 203（あるいは 207 年）はレプティス・マグナの凱旋門の年代比定に準ずるが詳細は後述する。下限の 217 年はユリア・ドムナの没年である。

16）紀元 203 年説については、R. バルトチーニ（Bartoccini）や P. W. タウンゼント（Townsend）らがセプティミウス・セウェルス帝の同年のレプティス・マグナ訪問を根拠に支持している（Townsend 1938: 523）。紀元 207 年説については、N. ハネシュタッド（Hannestad）は同帝一家の上述とは別の機会における当地訪問を根拠に、D. ゾフティング（Soechting）は凱旋門のカラカラ帝の肖像の型を、A-M. マッカン（McCann）はセウェルス帝の肖像の型を各々根拠にして支持している（Hannestad 1988: 272; Soechting 1972: 230; MaCann 1968: 74-78）。

17）紀元 215 年にアンティオキアで製作されたとされる。ユリア・ドムナとカラカラ帝の姿が彫られている。（Wiggers and Wegner 1971: 91）

18）アテナ女神像の面貌について、Despinis は「成熟した、45 歳前後の婦人」のようであると述べ、「セプティミウス・セウェルス帝が死去した紀元 211 年頃のユリアの年齢がその頃である」（Despinis 1977: 100）としており、そのような推測も可能であるが、既述のように肖像の面貌と実際の年齢との関係が不明なので、この点に関しては推測の域を出ないと思われる。

19）因みに、両型式にしばしば見られる頬の辺りに覗く髪の房の痕跡はテッサロニキの女神像には看取されない。この一房の髪が存在したとしてもその位置は頬の辺りにあるはずであり、テッサロニキの女神像におけるこめかみ部分の髪型輪郭線の彎曲とそれに続く波形線に関連づけることは困難である。

参考文献

Bakirtzis, Ch. (Μπακιρτζής, Χ.) 1977 Περὶ τοῦ συγκροτήματος τῆς Αγορᾶς τῆς Θεσσαλονίκης. *Αρχαία Μακεδονία* II: 257-269. Θεσσαλονίκη.

Bernoulli, J. J. 1969 *Römische Ikonographie* II 3. Hildesheim, G.Olms.

Brouskari, M. 1997 *The Monuments of the Acropolis*. Athens, Greece Ministry of Culture.

Buchholz, K. 1963 *Die Bildnisse der Kaiserinnen der Severischen Zeit*. Frisuren.

Despinis, G. (Δεσπίνης, Γ.) 1971 *Συμβολή στη Μελέτη του έργου του Αγορακρίτου*. Αθήνα, Ερμής.

Despinis, G. (Δεσπίνης, Γ.) 1975 *Ακρόλιθα*. Αθήνα. Υπουργείο Πολιτισμού, Ελλάδα.

Despinis, G. (Δεσπίνης, Γ.) 1977 Τὸ αντίγραφο τῆς Αθηνᾶς Medici τοῦ Μουσείου Θεσσαλονίκης, *Αρχαία Μακεδονία* II: 95-102. Θεσσαλονίκη.

Despinis, G., Th. Stephanidou-Tiveriou and E. Voutyras (Δεσπίνης, Γ., Θ. Στεφανίδου-Τιβερίου και Εμμ. Βουτυράς) 1977 *Κατάλογος γλυπτών του Αρχαιολογικού Μουσείου Θεσσαλονίκης*. Θεσσαλονίκη, Μορφωτικό ίδρυμα Εθνικής Τράπεζας.

Fejfer, J. 1984 Official Portraits of Julia Domna. A cura di Bonacasa, N. e G. Rizza, *Ritratto ufficiale e ritratto privato: atti della II Conferenza Internazionale sul ritratto romano, Roma, 26-30 Settembre 1984.*

Fittschen, K. 1978 Two Portraits of Septimius Severus and Julia Domna. *Indiana University Art Museum Bulletin* 1, 2: 28-39.

Fittischen, K. und P. Zanker 1983 *Katalog der römischen Porträts in den Capitolinischen Museen und den anderen kommunalen Sammlungen der Stadt Rom* III. Mainz am Rhein, von Zabern.

Ghedini, F. 1984 *Giulia Domna tra Oriente e Occidente, Le fonti archeologiche*. Roma, “L’Erma” di Bretshneider.

Goette, H. R. 1986 Zweimal Iulia Domna *Mitteilungen des Deutschen Archaeologischen Instituts, Römische Abteilung* 93: 245-251.

Hannestad, N. 1988 *Roman Art and Imperial Policy*. Aarhus, Aarhus University Press.

Heintze, H. V. 1969 *Römische Kunst*. Stuttgart, Belser.

Hinks, R. P. 1976 *Greek and Roman Portrait Sculpture*. London, British Museum.

Kent, J. P. C., B. Overbeck und A. U. Stylow. 1973 *Die Romische Münze*. München, Hirmer.

Kleiner, D. E. E. 1992 *Roman Sculpture*. New Haven, Yale University.

Mattingly, H. 1990 *Coins of the Roman Empire in the British Museum*, Volume V, Pertinax to Elagabalus. London, British Museum.

McCann, A-M. 1968 The Portraits of Septimius Severus (A.D.193-211). *Memoirs of the American Academy in Rome* 30.

Meischner, J. 1964 *Das Frauenporträt der Severerzeit die offziellen Portrats*. Berlin.

Mikocki, T. 1995 *Les Impératrices et Princesses Romaines Assimilées á des déesses*. Roma, Bretschneider.

Pantermaris, D. (Παντερμαλής, Δ.) 1972 “Capita Transformata” στο *Κερνος-Τιμιτική προσφορά στον* καθηγητή Γεώργιο Μπακαλάκη-: 111-119. Θεσσαλονίκη.

Pelekidis, S. (Πελεκίδης, Στρ.) 1925 Ο Τύπος της Αθηνάς των Μεδικών. *Αρχαιολογικόν Δελτίον* 9: 121-144.

Schlüter, R. 1977 *Die Bildnisse der Kaiserin Iulia Domna*. Münster, University of Münster.

Soechting, D. 1972 *Die Portäts des Septimius Severus*. Bonn, R. Habelt.

Thompson, H. A. 1958 Activities in the Athenian Agora: 1957. *Hesperia* 27: 145-160.

Touratsoglou, I. (Τουράτσογλου, I.) 1997 *Μακεδονία. Ιστορία-Μνημεία-Μουσεία*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών.

Townsend, P. W. 1938 The Significance of the Arch of the Severi at Leptis. *American Journal of Archaeology* 42: 512-524.

Wiggers, H. G. und M. Wegner. 1971 Caracalla, Geta, Plautilla; Macrinus bis Balbinus. *Das Römische Herrscherbild* III 1. Deutsches Archäologishes Institut Berlin, Gebr. Mann.

Williams, M. G. 1902 Studies in the Lives of Roman Empresses I, Julia Domna. *American Journal of Archaeology* 6: 259-305.

松尾 登史子
九州大学大学院人文科学府博士課程
Toshiko MATSUO
Graduate School of Humanities, Kyushu University